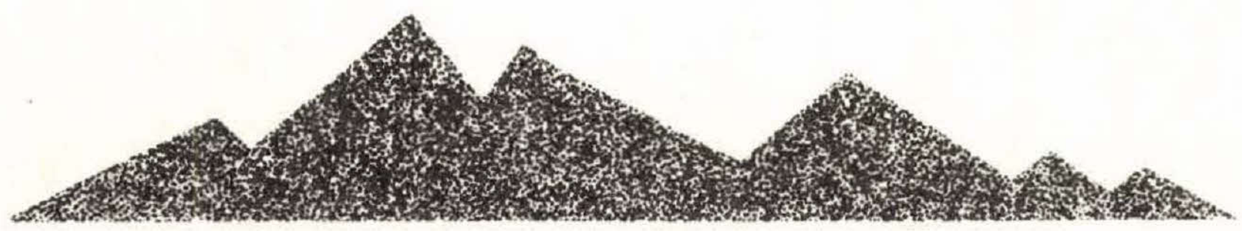
針葉樹会報

1987.2.　第68号

発行日 １９８７年２月１５日 発行所 針　葉　樹　会 印刷所 篠　田　印　刷	針　葉　樹　会　報 第 68 号	編集人 〒１６７　杉並区南荻窪 ３－２９－２３ 引　地　　真



―目　次―

訃　告　松尾　寛二……2
Y中さんのこと―　中村　保……3
穂高岳滝谷グレポン初登攀
一九五七年夏
森脇芳之君の思い出　望月　達夫……7
ツェルマットの休日　前神　直樹……9
ホイットニー山を登る　加藤　博行……14
会務報告……20

訃告

中村幸正君（昭和三十三年卒、会員）
昭和六十一年十一月三十日肝臓癌のため逝去。

享年五十三才、好漢Y中の惜しみて余りある急逝でした。

ご遺族のお話によると、十月中旬、CT検査により末期肝臓癌発見、余命半年足らずとの宣告あり。但し、医師のアドバイスもあって本人にはアルコール性肝炎と告げ、平常生活を続けさせる。十一月十四日、昭和建業出社直後突然腹部に激痛あり（肝臓からの出血）国立高崎病院に入院。翌十五日開腹手術。肝臓は既に崩壊状態で縫合不能のため、肝動脈結紮により止血。数日後、集中治療室を出て谷川連峰の見える一般病棟に移り、ご家族は病名を秘したまま徹夜の看病を続けられた。一時は小康を得て固型食を口にする迄回復したが、やがて肝動脈結紮の影響で意識混濁が始まり、二十九日危篤。遂に三十日午後九時十六分、ご家族に見守られつつ静かに永眠された。

十二月二日、自宅にて通夜。三日、昭和建業社葬により葬儀・告別式が厳粛、盛大に取り行われた。参列者は建設関係、JC関係、選挙関係、学友、隣人と広範囲に亘り、その数八百余人を数えて、故人の闊達な人柄と各界での活躍ぶりを雄弁に物語っていた。

針葉樹会からは、石井会長はじめ、中村（正司）、石原、奥野、甘利、石和田、佐薙、鈴木、瀬田、高崎（治郎）、松尾（寛二）、吉田、吉沢（貞一郎）、山本（健一郎）、柴崎、市畑、上原、中村（保）、西海、茂木、山田（邦行）の諸氏が通夜或は告別式に参列され、追って太田教授夫人、岡垣、安田の各氏が弔問された。

一月十七日、「四十九日」を迎え遺骨は近親の手で上越の山々を望む高崎八幡霊園に納骨され、位牌は市内の薬王寺（天台宗）に安置された。戒名　聰俊院泰忍正道居士。

その日快晴、寒の内とは思えぬ暖日に恵まれ、遠くに榛名、妙義、赤城の山々がくっきりと稜線を見せていた。

山と人を愛し、己を顧みず人に盡した故中村幸正君の霊、安からんことを祈る。

「吾を呆（わす）れ他を利するは、慈悲の極みなり」――伝教大師

四十九日の日　松尾　寛二記

Y中さんのこと——

穂高滝谷グレポン初登攀 一九五七年夏

中村 保

Y中（中村幸正）さんが地下足袋姿の土建屋スタイルで北穂南綾の肩にひょっこり現われた。麻雀の商大四天王を相手に身延山の決戦で勝ちを収め、槍ヶ岳から縦走して北穂でT中（筆者）と落ち合うためだった。その時T中は今は亡き篠原君と一緒に芳野満彦氏のテントに居候をしていた。滝谷第一尾根を登り終えて、さて次は何処にしようかと考えていた時に折良く、芳野氏からグレポンに誘われたのでY中さん、T中とも何となく同意した。が予備知識もなく準備もしていなかったので、未登ルートを狙う気負いも緊張感もなく偵察する程度の軽い気持で腰を上げたものだった。

滝谷に未登攀の岩稜があること、その名がグレポンであり、C沢右股奥壁とともに滝谷に残された二つの課題の一つとして当時の先鋭的クライマーの注目を集めていたことは知っていた。芳野氏も狙っていた一人であった。T中自身はさして積極的な想い入れはなかったので、何ごとによらず付合いを大事にし、人の誘いや頼みごとを断らないY中さんが加わらなかったらこの登攀は実現せず、初登の栄誉に浴することはなかったろう。一九五七年の八月、二人の留年組の学生生活最後の夏山だった。

八月二十九日（快晴）、昼過ぎにテントを出て第三屋根を下った。P2からアップザイレンで下降、グレポンの壮観なプロファイルをT4に降り立った。出し抜けにY中さんが、

「グレポンとはいったい何だい、白色レグホンの間違いじゃあないかな」

とヒョーキンなことを言いだした。なるほど上部の岩塔はトサカに似ている。お陰で芳野氏はこの岩塔をトサカ岩と命名した。T4から第三尾根の取付を経てグレポンの末端に出た。そこから風化された急傾斜の部分を避けて第三尾根側のルンゼを登って頭上に大きな菱形の白いスラブが見える地点から右にトラバースをして三人が立てるテラスにたどり

着いた。いよいよ登攀開始。十五時。

ザイルオーダーのトップは地下足袋の威力に期待してY中さん。登攀の模様は芳野氏の「山靴の音」から引用させていただく。

『三ツ道具が出され、二本のザイルでがっちり繋がれたセルフビレイ用のハーケンはY中君の手により歌い出され、トップのY中君が地下たびの摩擦を利用して小さな凹角をずり上る。左手に白色ダイアモンドスラブが望める地点より赤バンドに達した上のカンテに立つ。この付近でこぶし大の石が、T中君と僕のいるテラスに砂時計のように落下してくる。三人立つのがやっとのテラスなので、落石を避けるのはまったく苦労した。ハーケンを一本打ち、やっと第一ピッチを獲得。続いて僕、T中の順でY中君のいる地点に達した。

ラストを登ってきたT中君は、先登のわれわれの姿が見えず、常に落石の危険に見舞われ、ぼやいていた。ザイルオーダーのチェンジはこの小さなテラスでは不可能、そのまま第二ピッチをY中君が進む。急傾斜のため、頭上の足裏が見えたとたんに視界から消え去る。十メートルほど行くと凹角の中によいテラスがあるので、再びそこに集結する。この第二ピッチは左右に大石がグラグラゆれてきわめて不安定。

第三ピッチ。右の見事なスラブのリンネに入り直上し、オーバーハングの手前より左方のカンテにのし上る。カンテというより稜角といった方がピッタリする岩稜からは、草付き混りの不安定な斜面を右上に縫うように登れば、トサカ岩真下のナイフリッジに立てる。このピッチはだいぶ長いが、スラブとカンテ

（角稜）の登攀が気持よく、長さや時間を忘れさせる。Y中君が、これまで常にトップをやってくれたので、疲労の痕は暢気な彼の顔にまざまざと現われていた。ラストのT中君は落石という精神的なものに悩まされ、いっそうムッツリしてきた。

このリッジの上から見上げるトサカ岩正面の垂壁は、二個の大オーバーハングとともにわれわれの頭上を圧し魅力をそそる。何段もの アブミと数メートルの補助ザイルがあるので、取付けばなんとかなるかもしれないが時間がない。すでに十七時だ。

小憩の後、トサカ岩の左、第三尾根側のリンネに取りつく。すでに滝谷にいる登山者はわれわれ三名を残し、陽の光までが去ろうとしていた。僕は二度ほどそのリンネの直上に力つきて失敗した。ハーケンも何本か連打し、アブミの力を借りて、やっとトサカ岩とローソク岩の鞍部の見える地点に達した。今度はミドルに入ったY中君がアブミも利用せず登ってきた。T中君のくる間もわずかな時間のように思えた。第四ピッチは終ったのだ。あ

とは鞍部までトラバースぎみに十メートルほど、陽かげになった岩が馬鹿に黒く濡れて見えた。

トサカ岩とローソク岩の鞍部は大小の石がゴロゴロしたガラ場で、右側にC沢右股奥壁の核心部が一望できる。ちょうど第四尾根ツルムとDカンテの鞍部と対比し、ほぼ同高の位置だ。思いのほか時間を費やした。十八時半、やはり僕のトップが遅劣なのだろう。そのままザイルを引きずるようにローソク岩の右裏側へ廻りこむ。ガラ岩の詰ったルンゼ状の容易なもので、十五、六メートルくらいでローソク岩の裏側基部に達した。』

四ピッチ目がルート中で最悪だったと記憶している。トサカ岩の右手裏にまわりこんで僅かな場所を見つけてビバークの用意に入った。穂高はもう秋の気配、夏の軽装のままで冷えこむ一夜を明かすことになった。

夢うつつのなかで、♪おぼえているかい故郷の村を……♪三橋美智也の曲が暗闇の静寂にこだましている。何とまたまたY中さんの本領発揮である。隣で東海林太郎のような直立不動の姿勢で、しかもカラオケなんてまだない時代、マイクに向う仕草で美空ひばりの「港街十三番地」等昭和三十一、二年頃の流行歌を次々に歌っている。T中はと云えば、尻に岩があたって痛いし、うるさくて眠れなくなったので文句を言ったが、Y中さんは止めない。寒さしのぎにはこれが一番と歌い続けていた。夜明けとともに追いたてられるように登攀を始めた。再び「山靴の音」から引用する。

『三十日、寒気のため、夜明けとともに行動を開始した。僕は昨日のまま、チムニー状の上が開けたルンゼを、がむしゃらに直登し、左の稜角にのし上がった。ハーケンを打つのに、手こずったことは、岩が冷たく手が痛かったことぐらいしか記憶にない。凸角上のもろいテラスは、ローソク岩の先端とほぼ同高ぐらい、リッジ通しにローソク岩まで簡単に行けそうだ。この付近から左側の第三尾根方面に大きなルンゼが見下ろせる。そのルンゼに逃げれば主稜線までは時間的に楽そうだが、直上すればあと一ピッチで完全なテラスに出られる。Y・T中両君が続いてやってくる。

もろい凸角から右の広いルンゼに入り直上、小オーバーハングにはばまれ、右上の凹角に入らんと努力するが力尽きる。オーバーハングの左下にハーケンを打ち、それをたよりに右上の凹角上部を見ると赤錆びたハーケンが打ってあった。残念だがその凹角のハーケンには僕の力では達し得ない。ハング下のハーケンを利用して右方のカンテに振子のごとく飛んでみた。案外うまくカンテに取りつくことができた。カンテをそのまま直登すると、赤錆びた例のハーケンの真上に出られた。広い大きな安定したテラスだ。ミドルのY中君には、僕との間のザイルを利用して例のハーケンのある凹角を直上してもらった。やはり下からあのハーケンに達するには無理のようだ。おそらく試登の際、下降のために打ち捨てたものだろう。

最後の安定したテラスで大きくグレポンの

尾根は上下に二分される。C沢右股の奥壁を包むように主稜線の縦走路までいちおう続くが、ほとんど傾斜もなく、偵察のおり、何度か登下降しているので、左側にさけて十六時間ぶりにザイルを解いた。七時ちょうど。出発の速い縦走者が二、三人、稜線を北穂にいそいでいた。』

こんな調子でグレポンは終った。四半世紀以上も記憶を辿っているとY中さんとのふれ合いが走馬燈のように甦ってくる。ザイルを結ぶ機会も比較的多かった。パーフェクトと言える快心の山行、事故寸前までいった危なっかしい行動、涙をのんで断念した登攀、思い起こすと懐かしさはひとしおである。

四月の劔岳で早月尾根二千六百米にテントを揚げて登った八ツ峯は素晴らしかった。快晴に恵まれて雪稜のナイフリッジ登攀の残りが少なくなるのがおしく感じられるほどだった。三月の白馬岳主稜では苦渋をなめた。数米先も見えない荒れ狂う風雪の中を雪崩の危険に退路を断たれてシャニムニ頂上に攀じ登ったが遭難と紙一重の暴挙だった。そして卒業の年の三月、劔岳チンネ正面壁の積雪期初登を目ざした。Y中さん、現在ペルーのリマに居る丸山君、T中と三人共苦手なスキーを使って長駆弥陀が原経由で入山した。一週間の長アプローチの後、平蔵のコルに雪洞を掘ってアタックのベースを作った。しかしT中が体調を崩してチンネはあきらめざるを得なくなり、Y中さん、丸山君の二人で本峯南壁を登っただけの成果にとどまった。しかも、この時同じくチンネを狙って芳野氏のパーティーが池の谷から入り、先を越して初登攀に成功し、おまけに帰途芳野氏は我々の雪洞にころがりこんできた。T中は腹だたしくて仕方なかったが、Y中さんは何の屈託もなく芳野氏を受入れていた。

Y中さんが他人の悪口を言うのを聞いたことがなかった。誰に対しても親身になり、又誰からも親しまれた天性の人柄を、いまさらにして思い起こさずにはいられない。お互い仕事が一段落したら、何時かアンデスかヒマラヤかトレッキングに出かけようと言っていたがその機会がなくなってしまった。何時の日かY中さんの山の道具の一つでもどこか外国の山に持って行って置いてこようと考えている。御冥福を祈ります。

森脇芳之君の思い出

望月　達夫

旧友森脇芳之君が亡くなって二年余になる。当時の日記を見ると、土屋陽三郎君が電話で彼の急死を知らせてくれたのは、昭和五十九年六月二十八日の午前中だった。奥さんと久々の故国観光旅行の途次、佐渡のホテルで心筋梗塞により急逝したということである。まったく予想もしなかった寝耳に水のことなので、私はしばし茫然とした。

二十九日のお通夜で奥さんからうかがった話によると、森脇君は十八年前に癌の手術をやり、八年前に一部再発、そのため奥さんとしてはこの数年間、いつも彼の生命の心配がたえず、覚悟は充分していたということだった。平素遠く離れていて、そんな経緯をまったく知らなかった私は、その話にも吃驚せざるをえなかった。

戦後間もなく森脇君はアメリカに渡り、むこうの市民権を得てニューヨークに永住していたが、大学時代は同学年で、しかも共に山岳部に在籍したから、勿論彼のことを忘れることはなかった。源正寺（三鷹）での葬儀の折、MIT出身の息子さん（たしか二男）に会って、頼もしそうな青年だと思ったが、長男もMIT出身の優秀な人材だときくので、彼もその点は安心して逝ったろうと、わずかに心を慰めることができた。

森脇君は私と同じ昭和十三年の卒業で、同期には他に小谷部全助、小林重吉、和田栄達らがいた。山岳部時代の彼の足跡は『針葉樹』七・八・九号に載っているので省略するが、彼の渾名のバンチャンについて一言しよう。たしか五色温泉（宗川旅館）のスキー合宿で、誰かが彼を番頭とまちがえて「オイ、メシもってこい」と言ったとか、言わぬとかで、番頭—番公—バンチャンとなった（『針葉樹会報』五〇号、昭和十年十一月刊参照）。爾来バンチャンとして親しまれた。

私自身の忘れえぬ思い出は、むしろ学校を出てからずっとあとのことである。昭和四十五年（一九七〇）の五月下旬から六月へかけて、私が証券視察団の一員としてニューヨークに滞在中、彼が示してくれた暖かい友情の数々である。

先ず五月二十八日、ラ・ガーディア空港へ着いたとき、予想もしてなかった彼の出迎えをうけて驚喜した。三十一日（日）はホテルまで彼が迎えにきてくれ、同期の小川一郎君も偶々一緒で、午後はW・アーヴィングにゆかりのタリー・タウンに案内してくれた。アーヴィングの古い家がお伽話に出てくるよう

な田園風景のなかにあり、一五〇年位前の衣裳をつけた上品な婦人が説明役だった。われわれが予科時代に『スケッチ・ブック』を読まされた思い出と、私が文芸に興味をもっていたことを、彼がよく覚えていてくれて、こうしたもてなしとなったのであろう。その晩は緑につつまれたラーチモントの彼の家で、すっかりご馳走になり十一時近くホテルまで車で送ってもらった。

六月三日は、かねて彼がアレンジしてくれていたAACを一緒に訪れた。長老のヘンリー・S・ホール翁、秘書のマッキー嬢らに迎えられ、小じんまりしたフランス料理店で夕食を馳走になった。すんでからまたAACの一階のホールに戻り、アメリカのエベレスト登山の映写会に出席し、役員のJ・マッカーシーにも会ったりした。会話のへたな私にとって、彼が同行してくれたことは、何にもまして有難いことだった。

それから何年かして、私が社用でブラジルへ出かけた帰途ニューヨークによったときも、森脇君に会ったことがある。たしか四月三十日（一九七四年）で、「吉兆」へ彼を招いて昼食をともにし歓談した。

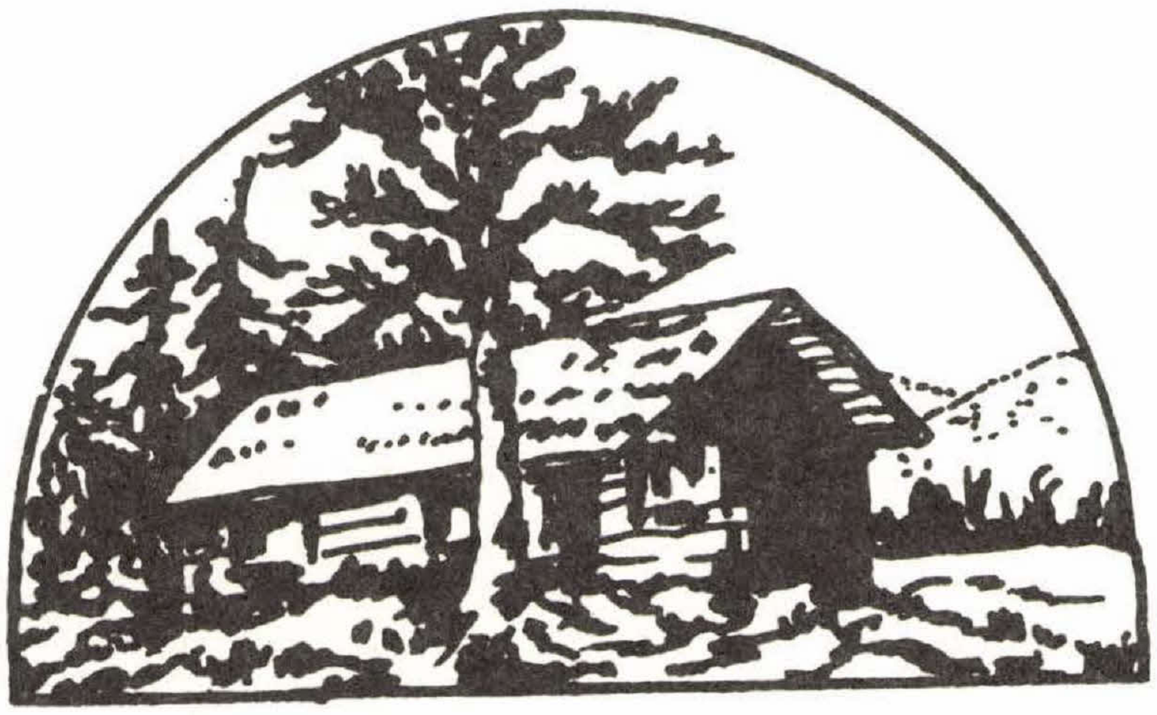
また、一橋山岳会隊が南米アンデスへ遠征した際、隊長の吉沢一郎さんが帰途しばらくラーチモントの森脇君の家に厄介になり、そこでAACでおこなう講演の原稿をかいたり、彼の一家に大層世話になったと、後日吉沢さんが述懐されていたのを思いだすのである。そのほかにもニューヨークへ行った針葉樹会員は少なくないので、彼に世話になった人は二、三にとどまらないであろう。

森脇君は学生時代からもともと派手なことがきらいで、どちらかというと重厚な性格であり、また人柄はきわめて誠実、友情にも厚かった。だから在ニューヨーク日本人間ではもとより、彼を取りまく公私のアメリカ人の間でも絶大な信用があったようである。

ひとに信用されること、殊に異国にあって外国人にまで深く信用されることは、日本人としていちばん大切なことであり、何にもましてわれわれの誇りに思うことではなかろうか。

七十になったか、ならぬかの年齢で、忽焉と逝ってしまった彼には、まだやりたいこと、やってもらいたかったことが多々あったであろう。奥さんやご子息たちの心中を思うと、到底涙なくしてはおられない。併し、立派な人生を終った友として、私はむしろ羨ましいほどの追慕の念を覚えるのである。

（一九八六年九月）



ツェルマットの休日

前神　直樹

やっとまとまった夏休みがとれた。五十九年末ロンドンに転勤したものの六十年の夏は長男の出産があったりで休みらしい休みは取れなかった。有賀さんや藤本にヨーロッパアルプスの話を聞いてもただ指をくわえて聞き役にまわるしかなかったが、次の年にはきっと行ってやろうと考えていた。六十年末にはノルウェー、オスロに移駐したもののヨーロッパアルプスは休暇を取る射程距離には入っている。藤本もまた今年ツェルマットで休みを取るという、一緒の時期にツェルマットで会えるかどうかはわからないがともかく天候が一番安定している七月下旬のスケジュールを五月頃には組んでいた。マッターホルンに登ることも決めてはいたが何しろロンドンに転勤して以来山らしい山に登ったこともなく申し訳程度のランニングでは効果の程も知れたもので、どことなく不安ではあった。

七月十九日いよいよオスロを離れジュネーブにと向った。休暇ぐらいしか楽しみのない女房もどことなく浮き浮きしている。満一才にもなっていない長男は何もわかっていないが。一週間前の電話では藤本も奥さんと同じ十九日ツェルマットに入るという、久し振りの山登りだなと思うと楽しみとともに幾分かの緊張感も覚える。三時間程の飛行と五時間の列車、電車の旅でツェルマット着。ホテルに落ち着くと早速藤本のホテルでも捜し出そうと街に出た。ツェルマットは村というがメインストリートはノルウェーのオスロよりはるかにあか抜けている、まるで「都会」だ。すぐに酒を買いに出ていた藤本と通りでバッタリ。一年振りでもありその日の晩は二家族で大いに飲んだ。

翌二十日、女房を連れ、子供をキャリヤーで背負って足慣らしにハイキング。快晴の中マッターホルンの写真ばかりを撮ることになったが、やはり撮らずにはいれない程この付近では際立った岩峰である。本当に登れるだろうかと、姿の秀麗さには感心しながらも、正直不安めいたものも感じていた。

二十一日は藤本夫妻とブライトホルンに登る。マッターホルンはこのあたりでは最もポピュラーな山なのだろうが高度は四〇〇〇メートルを完全に越えている。そんな高度まで登ったのはもう指折り数えなくてはならぬ程昔の話だ、四一六五メートルのブライトホルンは高度順応を一応しておくためには手頃な山なのだ。七時に下のロープウェーの駅で待ち合わせ、三台のロープウェーを乗り継ぐと一気に三八〇〇メートルのクライン・マッターホルン駅に着く。つまりここからブライト

・ホルン頂上まで約三〇〇メートルしかないのだから本当の高度順応になるかは疑問なのだが。クライン・マッターホルンの前は広大な雪の斜面が拡がり、イタリア側にかけては完全にサマースキーヤーの世界となっている。去年藤本達はガイドとここを登っているから、大体の勝手は知っている。すぐ傍に見えるブライト・ホルンの頂上までは何でもないただの雪の斜面だが、アンザイレンは必須らしくどのパーティもザイルを取り出している。これをばかにしてクレバスに落ちてはどうにもならない。藤本の七ミリか八ミリのザイルに三人繋がり出発。日差しが顔をじりじり焼くほど強くブライトマッターホルンの斜面にかかる時には足がもぐり始める。ただ登っている人間が数え切れない位で丁寧にトレースを追ってゆけば何ということもない。風が強まった頂稜に出るとすぐ頂上だった。約二時間の登行である。この少し前の地点には南面を登ってきたのだろう。完全装備にダブルアックスというクライマーが息を切らしながら上ってくる。一般ルートとは比べものにならない位難しいルートのはずだ。それにしても一般ルートの方はひきもきらず人間が登ってくる。狭い頂上にいつまでもいるわけにもゆかず早々に下山する。登ってくる人間はと見ているとヨーロッパだけでなく日本からの人も相当いる。どの日本人も別の日本人を見るとそう思うのだろうがそれにしてもこんな所までよく登る人がいるものだ。

ブライトホルンは結局往復四時間足らずの足慣らしではあったが、ツェルマット周辺の山の配置は概略頭に入った、高度順応の効果はどうであれそれだけでもよしとしておこう。

七月二十三日。ブラントホルンから一日置いていよいよマッターホルンに登らんとヘルンリ小屋に入る。三日間続いた快晴の天気もここにきて崩れ始めた。ヘルリン小屋に夕方までに入り、下で予約したガイドと落ち合い翌日登るというスケジュールだがロープウェーを乗り継ぐ頃には土砂降りとなる。ロープウェーにはハイキング客はおろか乗客は自分一人という何とも寒々しい有様である。午後三時ロープウェーの終点リッフェルゼーを傘を差して出発。ヘルンリ小屋までは二時間の行程だが人の姿などどこにもない道を歩くのは気が滅入る。おまけに雷までが鳴り始め一瞬金属性の物を身に付けていることに恐しくなったりもした。避難する所があるわけでもなく落雷しないことだけを祈って歩く。途中雹が激しく降ってくることもあり、一体どうなるのだろうとも思ったが今日は小屋に入る以外道がない。途中でアメリカ人二人を追越し一時間四〇分で小屋に到着。

ガイドの分も含めて宿泊代を払いあとはガイドの来るのを待つだけである。宿泊者は自分を入れて五人だけ、話に聞いていたヘルンリ小屋の賑わいなどどこにもない。天気が悪いせいか小屋にあるマッターホルン上部のモズレープラッツの写真など登れそうもない程急傾斜に見える。豪華とはいえないまでも一応コースとなった夕食を終える頃僕の予約したガイドであるフィリップが現われる。年の頃は二十四、五か、いわゆる老練なガイドというイメージではなくスマートなマウンテン・ウェアに身を包んだ体の大きな若者である。

彼の説明によれば天候も悪く、特に上部は積雪が多く決して良いコンディションではないこと、従って明日登れるかどうかは分らないがいづれにしても明日朝の彼の決定に従ってもらうと言ってきた。他の登山者もそれぞれのガイドから同じことを言われておりこちらはそれに対して異存はない。日暮間近の小屋からの景色は灰色一色で、ダンブランシュもモンテローザもヴァイスホルンもすべて頂上は雲の中、マッターホルンも小屋のすぐ上から霧の中に隠れ一体何処に頂上があるのか見当も付かない。どうも駄目かもしれないと思いながら早々に小屋の毛布にくるまって寝る。

翌日朝四時、窓の外は真黒だが天気が相変らず良くないことだけはわかる。案の定フィリップは気を悪くしてもらっては困るが、登山は中止するという、雨こそ止んでいるがこんなコンディションでは登頂は非常に危険だという。下に降りたら必ず天気の良い時を選んでホテルに連絡する、この休暇中に何とかして登らせてやると、彼も懸命だ。数日中にまた小屋で会うことを約し、凍りついた道をツェルマットへととって返した。女房はどうして登らなかったのなどと気軽なことを言ってくれるがやはり上のことは下の街ではわからない。

それからフィリップは何回かホテルに電話をくれ登るチャンスを狙って算段している。ヘルンリ小屋から下りてきた翌二十五日天候は回復し次の二十六日までは確実にもつという。それじゃ二十五日夕方またヘルンリ小屋で会って今度は是非登ろうということになった。

二十五日午後遅くまだ陽がかんかん照る中ヘルンリ小屋へ向う。二日前とはうって変ってやたら暑い。行き交う登山者も多く、「ボンジュール、ムッシュー」などとパリの街角にいる方が似合うのではないかというような女の子から声を掛けられると心までが浮き浮きしてくる。一時間半の行程、五時前に小屋着。小屋に泊る登山者は約五十名、全員がまず間違いなく明日マッターホルンに向う筈だ。小屋は満員である。小屋に着いてしばらくすると日本人二人が山から下りてきた。一人はこのアルプスでガイドをしている近藤国彦氏でシャモニーから出張してきているという。朝四時から十三時間行動だったとのことでガイドされてきた中年の女性は殆ど夢遊病さながらに疲労困憊の様子であった。近藤氏は明日もう一人の日本人を連れて登るというから大した体力である。彼の言ではこの五時という時刻まだソルヴェイ小屋の上部にガイドレスの日本人パーティが行動しているはずと確かにはるか上部の急な雪面を見上げると黒い点が四つ動いている。岩壁に雪が張り付いているというような傾斜で明日あそこを上り下りするのかと思うといささか自信がなくなる。マッターホルンの一般ルートをしかもガイドと登るのだから大層な山登りではないはずだが。明日マッターホルンに登ろうという登山者の中に日本人は自分を入れて五人いる。各人なりに緊張しているようだ。フィリップは六時頃現われ、明日は天候も絶好、まず間違いなく登れる、荷物は極力軽くする、朝四時には出発できるよう三時半には朝食を

済ませよう等々、細伝えてくる。基本的なことは日本の山と変りないのだからとにかく睡眠だけ充分は取っておこうと早々と眠りに就いた。

翌二十六日、三時頃から皆起き出す。朝食の時間は決まっているからいくら早く起きても同じなのだが登るとなるとそう落ち着いていられない。パンにコーヒーという一番苦手の朝食を無理矢理詰め込みすぐに出発の準備にかかる。小屋で水筒に紅茶をつめて貰い、ゼルプスト、スパッツを着け、ヘッドライトの調子はどうか、小屋の前からすぐアンザイレンとバタバタする内出発は四時半となってしまう。おそらく今日出発する約五十パーティーでは真中位の出発なのだろう、闇の帝王のようにそそり立つマッターホルンの岩壁に細々とヘッドランプの列が上ってゆく。最初は寒くて震えていた体も三十分で暖かくなってゆく。運動のためというより次々に現われる岩壁に緊張感と一体となった興奮を覚えて寒さのことなど忘れている。前々日の雪、ベルグラは完全に消えていて乾いた岩をフィリップが伸ばしてゆくザイルに合わせて登る。要所要所は僕を確保してくれるが、それが恐しい位スピーディーで確保姿勢をとる間こちらが待つなどということは全くない。時計など見ている余裕もなく傾斜のきつい所はまるで引張り上げられる感じだ。少しは自分の手足で久し振りの岩の感触を楽しみたいのだが、どうにもこのガイド付きのマッターホルン登山はそんな悠長なことは許さないらしい。休憩などなくルートをゆっくり見るなどということもなく六時半ソルヴェイ小屋着。すっかり明るくなった周囲の山々に朝日が当たってゆくがのんびりと鑑賞している余裕はない。ここから風が強くなるのでとヤッケを着込み、また頂上までは休みはないとて紅茶を腹に流し込む。約十分の休みで出発。

ここからがモズレイプラッツと呼ばれる岩壁帯だがこれが大変だった。ベタッと張られたどこまで続くのかと思う程長いフィックスド・ロープをフィリップは軽業のようにスイスイと登って行く。昔はこういうフィックスド・ロープを登るのは得意だったがもう腕力がついてゆかない。岩は三点確保でなどという教科書的なテクニックはここにはない。フィックスド・ロープだろうが何だろうが使えるものはすべて使ってスピーディーに登ることだけが第一義だ。フィリップが上からロープで確保している以上岩登りの「お勉強」をしている隙はない。途中のんびりスタカットで登っている日本人パーティーを追い抜き、何を摑んでいるかわからない位握力と腕力を使い切った頃、フィックスド・ロープ帯のモズレイプラッツは終った。これから昨日の夕方日本人が行動しているのを見た急傾斜の雪田となるためアイゼンを着ける。ほぼすべてのパーティーが同じようにアイゼンを着けるため立ち止っている。もう頂上までいくらもないとは言うがここで気持ばかり焦るとバテかねない。ひたすら安定したスピードで一歩一歩高度を稼ぐことだけに専念する。いつしか傾斜が緩くなっている。岩の雪のミックスしたあたりをアイゼンでガチャガチャいわせながら必死で歩く。先に登ってすでに下山を開始した近藤国彦氏からもう少しですよ、頑

張ってと声をかけられる、とそこが頂稜で頂上までもう五十メートルもない。頂上への雪稜をへたらんばかりに行くともうそこより高い所はなかった。八時四十五分着。

快晴の頂上である、眺望は素晴らしい。ツェルマット一円の山々は勿論、モンブランもかなたにどっしりと腰を落ち着けており、メンヒのあたりも見えるはずだがどれがどれだかよく分らない。マッターホルンのリオン山稜がはるか下に消えるあたりにはイタリアの村々が朝日に輝いている。フィリップは手慣れた様子で僕の写真を撮ってくれ、ちょっと下に降りてゆっくり休もうという。次から次へと来る人々を前にしては狭い頂上を占領しているわけにはゆかない。五分程下った陽は当たるが風がないという絶好地で大休止。食欲など全くなく、ひたすら紅茶をがぶ飲みする。

九時二〇分頃下山開始。正直あの長い急傾斜の雪田、岩壁を下りるのかと思うとうんざりする。ザイルオーダーは登りと逆で今度は僕がトップに立つ。とにかく早く下山したい一心でふらつく足を誤魔化しながら必死に下りる。かなりのパーティを追い抜く。急な岩壁では確実にクライムダウンしようとしたらフィリップは駄目だという。谷側に体を向け、落ちるように降ろという、自分が上から確保しているのだから危険は全くないという論法だ。確かにそうやって降りる方が速いがこっちにも恐怖心がある。最初は中々できなかったがその内体重はロープにあずけ、ええいままよとずり落ちるように降りる。モズレイプラッツは要所に打たれたピンをビレイピンとしてアップザイレンの要領で降りてゆく。そうゆう所をフィリップは僕を下に待たせてクライムダウンしてくる。それも身体を谷に向けて物凄いスピードで降りてくるものだからこっちはあっけにとられる。この調子で下山してゆけば時間などかかるはずもない。

ソルヴェイ小屋でアイゼンをはずし小休止のあとまた下山を続ける。この頃にはもう足元も覚束無いという有様だったが常に上から確保されるロープに身体を任せ精一杯のスピードで降りる。半分走っているような箇所もあったがそんなスピードが長続きするはずもなく、スピードを緩めるとフィリップが叱咤激励してまた足を速めるという繰り返しである。かなりのパーティーを追い越しようやくヘルンリ小屋の屋根を見下すあたりではトップで下山していた。十一時頃殆んど這うようにしてヘルンリ小屋着。

正直疲労困憊である。陽が燦々と照りつける小屋の前にへたりこむ。下山している最中はそこ緊張感もあって自分の足で歩いてはいたが、のんびりとお茶を飲んでいる人々を見たとたん身体に疲労感だけが重くのしかかる。久し振りの山登りは予想以上に応えた。しかしまあまあのスピードで下山できたことに多少の満足を覚えしばし小屋の前で横になって下山してくる人間を見ていたら少しは活力が戻ってくる。フィリップもそこそこ満足したのか来年も是非登ろうという。オーバーガーベルンホルンやダンブランシュあたりはどうだと言うがそう簡単にはゆかない。家族のことを考えると毎年ツェルマットで休暇を取るわけにはゆかないのだ。ガイド料四五〇

フランを払いながら「考えさせてくれ」と返事をしてフィリップと別れた。ツェルマットへの道は重い足を引きずりながらも気持の良い下山となった。

あまり自分の力で登ったという感じはしないがこれがガイドと一緒のヨーロッパアルプスなのだろう。ツェルマットに降りると早速藤本たちと連絡をとって成果を話しながら酒を飲む。彼らは夫婦でブライトホルン、ポルックス（四〇九一メートル）アルプフーベル（四二〇六メートル）と登っており、マッターホルンのような銀座にはない山登りにしごかれたらしい。こちらは翌二十七日にはオスロに帰らなくてはならないが藤本たちはさらに三日休暇があり最後にモンテローザ（四六三四メートル）を登るという。今度来る時はせめて二週間位は休みを取らなくてはなあなどと思っているがどうなることか。全般的に素晴らしい天気に恵まれてこの満足すべきツェルマットの休日をいつかまたやってみようと藤本たちと酒を飲みながら考えていた。

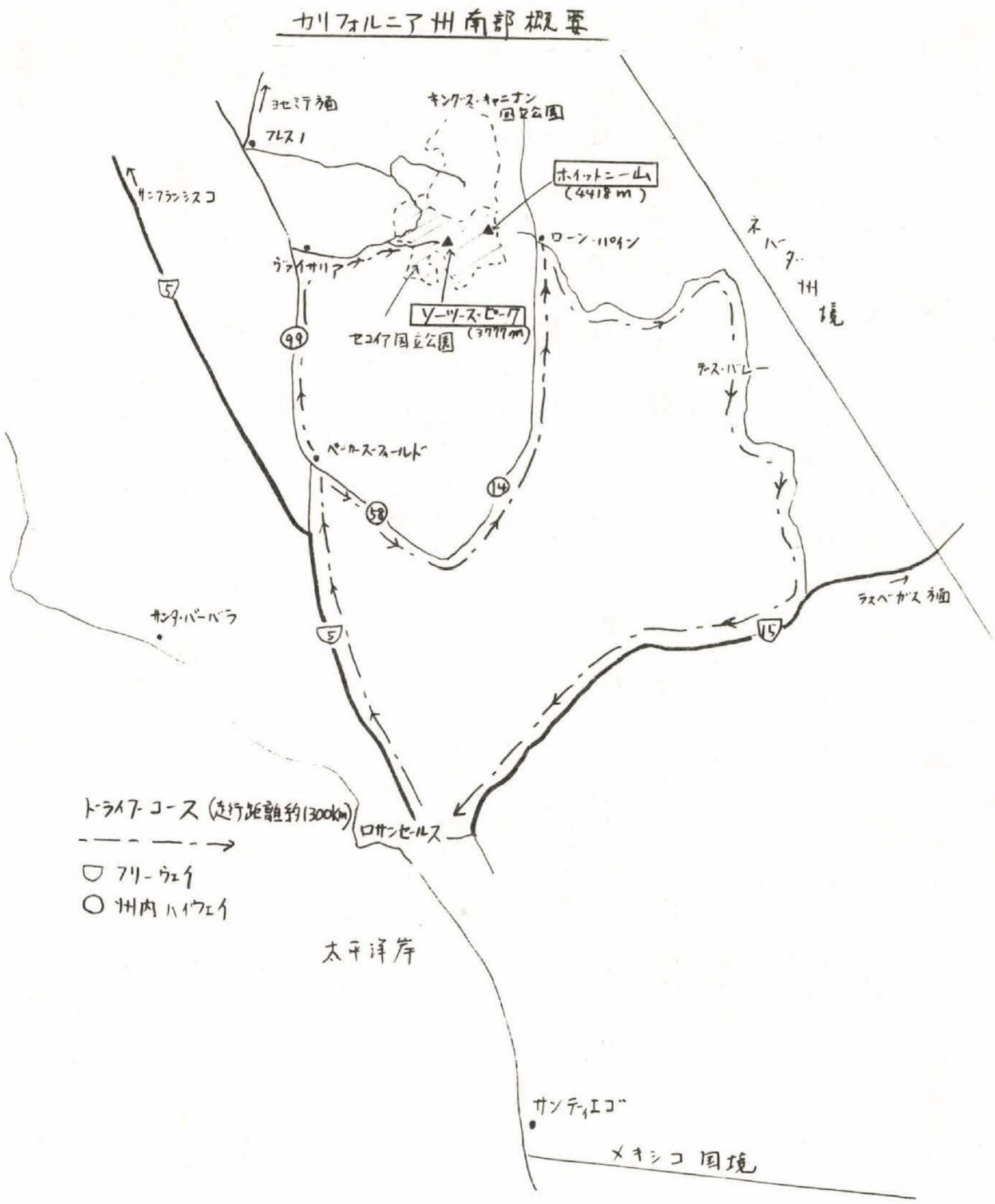
ホイットニー山を登る

加藤　博行

「カリフォルニアの山に登りませんか。」六月の或る日、ワシントンに住む佐藤君（昭五十三年卒）から電話がかかってきた。二年余りにわたる米国駐在を終えて九月に帰国するので、最後の夏休みを山で過ごしたいと、登行意欲に溢れていた。オスロにいる前神氏とロンドン在住の藤本氏が、七月下旬にツェルマットをベースにしてスイスの夏山を登る話を既に彼も耳にしていて、そちらにも心を魅かれていた様子だった。しかしアメリカ生活を締めくくるのはアメリカの山とのことで、シエラ・ネバダ周辺の山々をだしに僕を誘っているのはすぐに察した。

僕自身は、昨年十月ロサンゼルスに駐在員として赴任以来八ヶ月を過ぎ、毎日の生活も忙しいばかりで単調になっていた。季節感のない街にも飽き始めていたので、そろそろ山登りを再開したいと思っていた頃であった。問題は日本にいた時以上に難しい夏期休暇の取るタイミングと、家族をどうするかの二点だった。しかし両方とも右余曲折はあったものの、その後佐藤君からもう航空券を買ってしまったとの手紙も来て、半ば強引に七月下旬に日を決めてしまった。

登る山はと言えば、まず第一にホイットニー山（四四一八メートル）で一致した。同山はロサンゼルスの北三六〇キロに位置し、セコイア国立公園内にあって、アラスカを除くアメリカ本土の最高峰である。実はこの山は、



最初名前すら知らなかった処、吉沢大先輩より二度も便りを戴き、是非頂上の小石を取ってきて欲しいと頼まれたことが、何としても登るべしと僕を駆りたてていた。

佐藤君は、昨夏ワイオミングのグランド・ティトン（四一九六メートル）に引地君と学生の谷口君の三名で登っており、二度目の北米登山で最高峰のホイットニー山は、すんなり決めていた様だった。

登山計画は、一応一週間を目途とし、ホイットニー山の前に足慣らしとして、同じシエラ・ネバダ山脈内のソーツース・ピーク（三七七七メートル）を日帰りで登ることにした。その後、車で移動して二日間かけて主目標のホイットニー山を目ざせば、ルート自体難しいところはないらしいので、体も慣れてうまくいくに違いない。

ただこでひとつ問題になったのは、ホイットニー山の登山許可（クォータ）が事前に取れなかったことだった。同山は毎夏多くの人を迎える為、自然保護の見地から入山者を制限している。我々の申請事期が遅すぎた為、出発直前にレインジャー・マテーションから、当日早い者勝ちで一五名まで許可するが、まず無理だから諦めて他の山を考えておくようにとの返信が来た。日本の帰省列車の座席予約じゃあるまいし、今更その気にもなれない。兎に角現地に行けば何とかなるだろうと、七月二十六日佐藤君とロサンゼルス空港で合流し、フリーウェイを一路シエラ・ネバダに向

けて車を飛ばした。

一、ソーツース・ピーク登山

七月二十六日　一一・三〇　ロサンゼルス空港発　一七・三〇　ミネラル・キング着

（車）

ホイットニー山の山行記録に入る前に、トレーニングを兼ねて登ったこの山のことを簡単に述べておきたい。空港より北に向った我々は大穀物地帯のベーカーズフィールドを抜け、ヴァイサリアを経て四時間後には、シエラ・ネバダの山中に入った。道は急速に狭まり、日本の南アルプスの林道とよく似た景観を呈するようになる。やがて夕暮せまる頃、ソーツース・ピーク登山基地のミネラル・キングに到着。キャンプ・サイトは満員だったので、山小屋の庭先にテントを張り、そそくさと寝た。

七月二十七日　五・五〇　山小屋発　六・二〇　トレイル・ヘッド　九・三〇　モナク・レイク　一二・一五　ソーツース・ピーク　一七・三〇　帰幕

この山を知ったのは、勤務先のアメリカ人同僚が七月四日の独立記念日にミネラル・キングへハイキングに誘ってくれたことがきっかけであった。文字通り『鋸岳』と呼ぶに相応しい巨岩の切り刻まれた稜線をもつこの山は、我々の身体を久し振りの山に慣らす格好の対象になった。

薄っすらと空が白み始めた頃、テントを後にした我々は、明瞭なトレイルの刻まれた林の中をぐんぐん高度を上げていった。気候は日本の五月に近い感じで、日射しが当たると暑い程だが、日陰はひんやりとしている。松や杉に良く似た林相から、やがて灌木へ変わり、山肌を絡む様にスイッチバックを繰り返して行くと、岩屑ばかりのトレイルとなり雪田が点在し始める。更に山懐へ歩を進めると小さなせせらぎが現われ、更にその奥から大きな音をたてて、膨大な水量が谷に向って落ちていく。

流れのそばをひと登りすれば、三〇〇〇メートルの高さに透明な水を湛えたモナク・レイクが姿を現わした。こうした景観は日本の山と大いに異なって本当に新鮮な印象を与えてくれる。湖を覆うメドウと、残雪を渡る風が何とも言えず心地良い。

モナク・レイクより岩屑の急斜面をあえいで登れば、そこはもうピークに至る稜線だ。巨岩のあい間を縫う様にして登りつめること一時間余り、程なく頂上に辿りつくことができた。

頂上から東にカーン谷を大きく隔てて、遠くホイットニー山とそれに連なる山々が望まれる。順調に行けば、三日後にはあのピークに立っているはずだ。それにしてもホイットニー山群は周囲に技きんでて高く、大きな山塊を形成している。

一年振りの登山の懐しさと、心地良さを存分に吸いこんで、我々は下山の途に着いた。運動不足がたたって、疲労が急速に押し寄せる。ロサンゼルスには電車もなくバスも余り役立たないので、毎日車での生活になる。その為歩く機会が全くと言っていい程ない。ビルの階段など慰みに駆足で登った処で、毎日衰え続ける足はとても回復できそうにない。

佐藤君もワシントンで同様らしい。今日の一〇時間余りの登行がホイットニー山で役立てば幸いである。

その日、最後は足をひきずりながらテントに辿り着いた。巨大なセコイア杉と、渓流に囲まれたキャンプ・サイトで簡単な夕食を済ましし、どっと寝くずれた。

二、ホイットニー山登頂

七月二十八日　八・〇〇　ミネラル・キング発　一五・〇〇　ローン・パイン着（車）

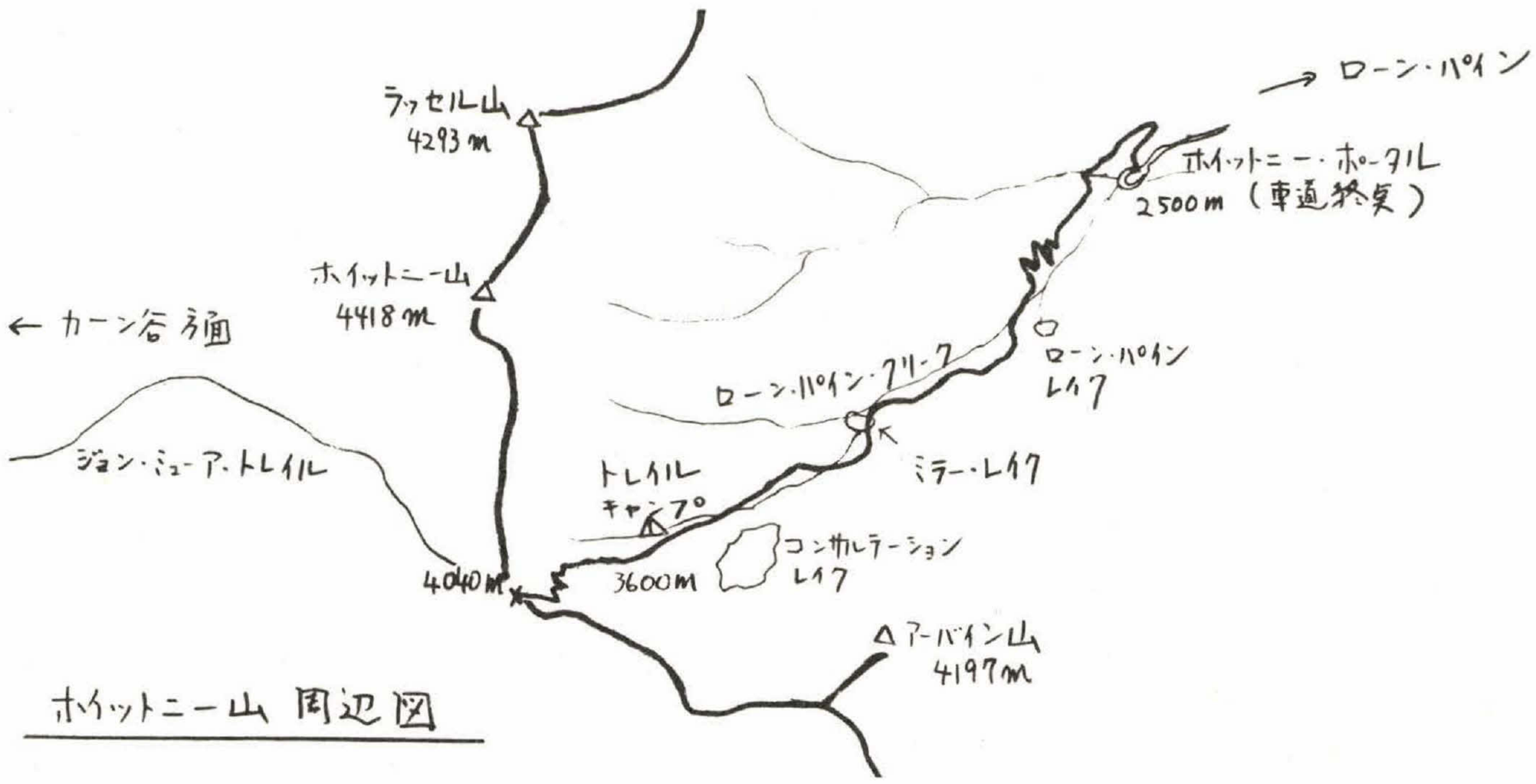
最初の目的を無事果して、今日は一路ホイットニー山登山基地のローン・パインへ向けて長駆四〇〇キロメートルの移動である。高度差の激しいセコイア国立公園を、横断する車道は一本もない。その為直線距離では三〇キロメートルの行程を、シエラ・ネバダ山脈の南端を大きく回りこまなければならない。（地図参照）

緑の多い南西部から、ネバダ州境側に廻ると、乾燥地域特有の砂礫質の低山と、枯川が拡がる。やがて高い峰々が再び行く手にせり上り、オアシスの村を二つ走り抜ければ、登山基地ローン・パインの町並みが現れた。

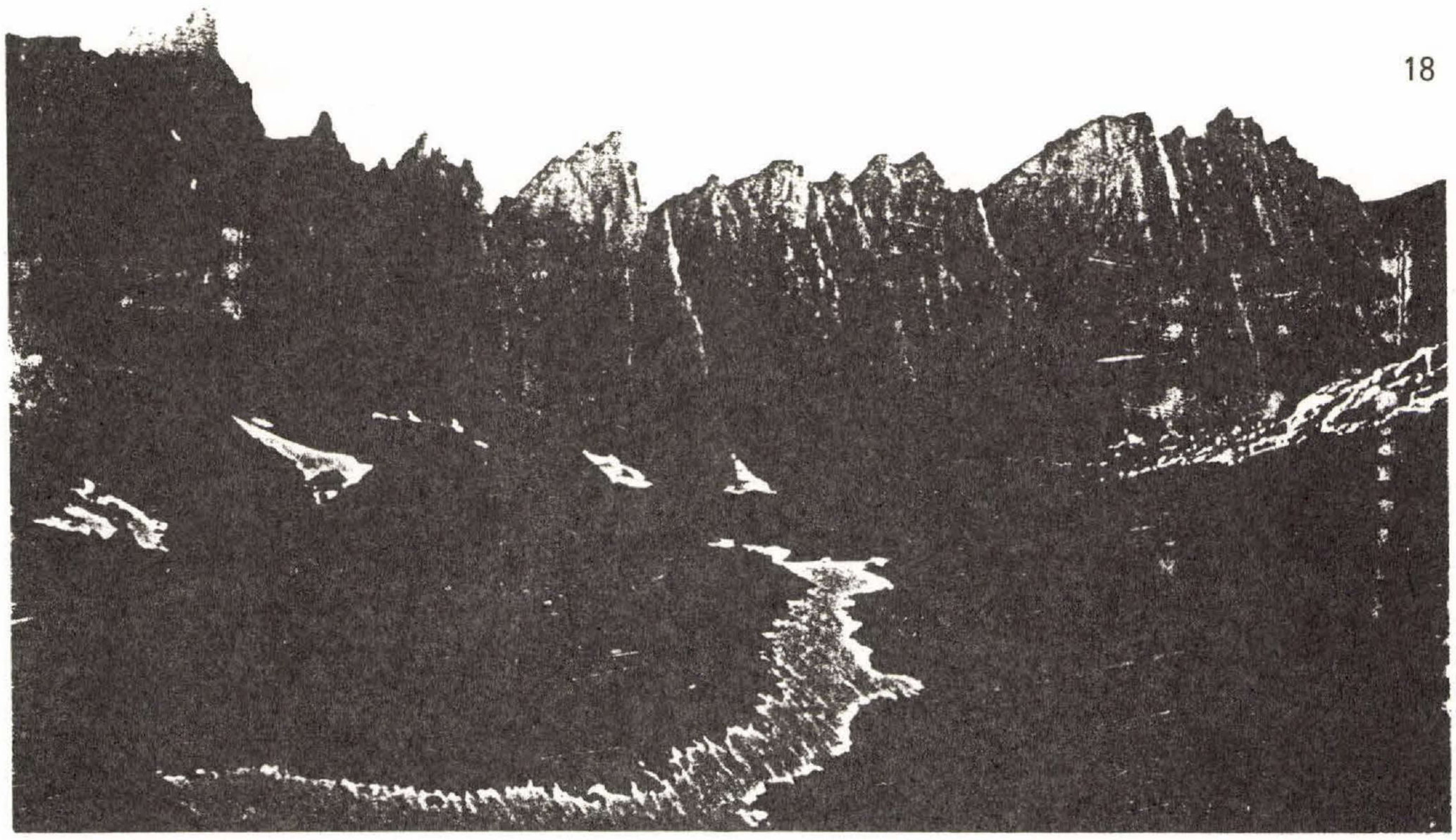
眩しい光の中に、ホイットニー山が前衛峰を従えて最奥に屹立している。一一〇〇メートルの町から、四四一八メートルの頂上まで一気に高度を上げ、真青な空に堂々たる姿だ。ここから見る限り、ガイドブックにある「黙々と歩けばピークに届く」山とは、とても信じられない。

レインジャー・ステーションで登山許可を確認すれば、やはり割り当ては一日一五人までで、先着順とのことである。今日も朝七時に事務所が開いた時、長い列ができていて何組かは諦めたと言う。ただ一般ルートの北の沢沿いに、トレイルこそ不明瞭で藪こぎもあるが、熟練者向きのルート（マウンテニアリング・ルート）があり、そこならいつでも割り当てが取れるとのことだった。

この日夕方は、町より少し山寄りのローン・パイン・キャンプ場にテントを張った。キャンプ地と言っても、荒涼とした砂漠の窪地に、簡単なテーブルといすが据えつけられて



ホイットニー山 周辺図



いるだけだ。昔、西部を馬車で旅したパイオニア達は、砂漠の中のこうした僅かな水場で幌を休め、一夜の休息をとったのであろうか。

夕暮れと共に周囲の山々が、赤レンガ色に焼き上げられる。テント内から赤銅色に輝くホイットニー山が眺められる。佐藤君と地図でルートを追いながら、明日六時に並んで一般ルートを第一に申請すること、駄目な場合マウンテニアリング・ルートに転進することを決めた。

七月二十九日　八・〇〇　ローン・パイン・キャンプ場発　八・二〇　ホイットニー登山口　一一・三〇　ミラー・レイク　一三・五〇　トレイル・キャンプ

幸運にも佐藤君は、早朝一般ルートの許可を得て戻ってきた。テントを直ちに撤収して車で前衛峰の山肌をまけば、あれ程遠くに見えたホイットニー山が、見る間に巨大な山塊となって我々の目前に立ちふさがる。樹林の中の駐車場に車を停め、我々は小さな点となって登山道の緒についた。

今日の行程は、三六〇〇メートルにあるトレイル・キャンプまでである。道はしっかり刻まれていて迷うことは全くない。小人数のパーティと前後しながら我々は黙々と歩くことを決めこんだ。

ホイットニー山は一八六四年に初めて地図に登場するが、当初東西南北どの方向からも登頂不可能な山と考えられていた。初登頂は一八七三年、西のカーン谷から釣師三人により達成された。現在の一般ルートは二〇世紀に入って整備され、特に上部岩壁帯はダイナマイトによって切削されたものである。

登り始めて二時間後、ルートは樹林帯から、小さな清流が幾筋も流れるメドウへと導びかれる。初日の行程をここまでとし、スケッチに興ずる優雅な登山者も多いようだ。

我々もここで水を補給し、ひと息入れることにした。頂上で誕生祝いをやるという中年のアメリカ人が、陽気にはしゃいでいる。パーティーの一人は、佐藤君が昨夏登ったグランド・ティトンに同時期登頂しているらしく、話がはずんだ。

メドウは丁度モレーンの末端にあたり、ル

ートは愈々モレーン上の複雑な岩筋の中を縫う様に伸びていく。右にミラー・レイクをかわし、更に高度を上げれば緑の灌木帯も終りとなり、巨大な岩の上をひたすら登ることとなる。しかし水とは無縁のはずの岩塊の懐に、上部氷河湖の流水や万年雪の融水が、見事な流れをきざんでいるのは全く驚きと言う他ない。白い花崗岩の照り返しに目を細めながら、流れの傍らで昼寝を決めこむ。今日の行程も、もう僅かだ。

大きく休憩の後、ひと息登ればコンサルテーション・レイクの湖面が現われ、その一段上がトレイル・キャンプ場である。木造の避難小屋もあり、登頂を終えてきた人々が往きかう。ここからは、主稜線へのトレイルも一望でき、ホイットニー東面の岩場が巨大な屏風を立てかけた様にせまってくる。時折アメリカ空軍のジェット機が、すさまじい爆音をたてて旋回していくのには辟易した。それさえなければ、ここは静かで穏やかなハイ・キャンプである。

七月三十日　五・五〇　トレイル・キャンプ発　七・四〇　トレイル・クレスト（稜線上）　九・一〇　ホイットニー頂上　一二・一〇　トレイル・キャンプ　一三・二〇　キャンプ撤収　一六・四〇　登山口

今日は入山後五日目。漸くホイットニーに手が届くことになった。高度差八〇〇メートルの僅かな行程だ。日の出前にテントを後にする。言うまでもなく一点の雲もない快晴だ。なにしろこの山は年に十日、雨（または雪）が降るかどうかと言ったアメリカ中、最高の好天地域だ。恐しいのは雷雨だけでそれも一週間程前に通過している。

トレイル・キャンプから稜線への急斜面につけられたジグザグの道に取りつく。紫色のすみれに似た花とタンポポ風の花が目につく。（ガイドブックによれば、スカイ・パイロットと、アルパイン・ゴールド）　広大な岩屑の斜面に見事に咲き開いている。

主稜線への登りは、北アルプス剣岳を前剣から登るルートによく似ていて、所々鉄杭と鎖で整備されている。雪田も僅かに残っていて久し振りの雪のトラバースが心地よい。二時間で急斜面を登り越せば、一気に一八〇度視界が拡がって、そこは四〇〇〇メートルの主稜線だ。初登頂ルートであるジョン・ミューア・トレイルが西のカーン谷からせり上り、同地点で合流している。

広大なカーン谷を挟んで三日前に登ったソーツース・ピークも遠くにくっきりと見わたせる。早朝のせいもあって、稜線上の岩はひんやりとして寒い程だ。トレイル・キャンプから眺めたホイットニーの東面は難攻不落の壁だが、西側の斜面は夥しい程の岩塊を積み重ねて、非対称形特有の山容を形成している。

頂上までは、ひたすら緩斜面に刻まれた明瞭なトレースを歩くのみだ。しかしさすがに四〇〇〇メートルを越して息が切れる。ハーハー言いながら、それでも軽やかに歩いて九時一〇分遂に頂上着。一メートル以上もある大きな岩板をいくつも積み重ねた広いピークである。避難小屋も直下にあって大らかな風情である。難しい登路が全くなかったので、今ひとつ物足りなさも感じたが、一年のブラン

クを置いてのアメリカ初登山だから、これで良しとすべきであろう。

頂上から東は、遠くかすむ程、赤茶化た砂漠地形が展開、西と南北は山また山がうねる広大なシエラ・ネバダの連山である。大小の氷河湖が点在し、雪田を中腹に抱えた山々が無数に拡がってとどまる処をしらない。五年前、倉知、柿原両先輩と登ったカナディアン・ロッキーズのテンプル・マウンテン（三五四三メートル）頂上の風景を彷彿とさせる。緯度が低い為、カナダの様に懸垂氷河等が残らず、その分ハイ・シエラの山々は単調な趣きとなっているのが残念に思えた。それにしても、さすがに四四一八メートルの高さは他の峰々を圧倒して堂々とした山裾を拡げ、東側をすっぱりと切り落として見る者の足許をすくませる。

小動物が時折サブザックに近づいては食物を手に入れようとして騒がしい。吉沢大先輩との約束を果すべく、形の良い石をザックに詰め、やがてピークを離れることにした。佐藤君は少し体調を崩しており、僕も軽い頭痛がし始めた。多少高度の影響が出ているのだろう。

帰途六三歳で頂上を目ざす老人を含む男女のパーティとすれ違った。この山はやはり日本の富士山の様な存在であることを改めて感じた。稜線を一気に降り、トレイル・キャンプのテントも撤収して下山を加速する。今日はもうテント生活も終りにして、快適な山麓のロッジに泊まり、思う存分垢を流すことにした。

終ってみれば、たった五日のシエラ・ネバダ登山であったが、佐藤君にとってはアメリカ生活を締めくくるに相応しい山旅であったであろう。僕にとっては、カリフォルニアの広さを改めて知り、他州の山へも足を伸ばしてみたい思いにかられる、愉しい登山であった。

（追記）ホイットニー登山の帰途、我々はネバダ州境近くのデス・バレーを経由してロスへ向った。そこには西半球の最低点である、海抜マイナス八六メートル地点があり、奇しくも我々はたった二日の間に、アメリカ本土の最高点と最低点を踏んだことになった。

═══ 会務報告 ═══

一、昭和六十一年忘年会報告

出席者　松木（3）・近藤（4）・吉澤（7）・増山（8）・柿原（12）・望月（13）・佐々木（14）・佐野（16）・宮城（16）・根本（17）・久保（17）・鈴木（19）・小林（19）・樋口（22）・大島（23）・石井（23）・笠原（24）・中村（28）・石原（30）・高崎（31）・山本（32）・甘利（33）・岡垣（33）・市畑（33）・渡辺（35）・中島（36）・石（36）・有賀（36）・倉知（38）・竹中（39）・名和（39・9）・佐藤（41）・西牟田（47）・佐藤（53）・引地（55）・岡部（55）・大野（学）

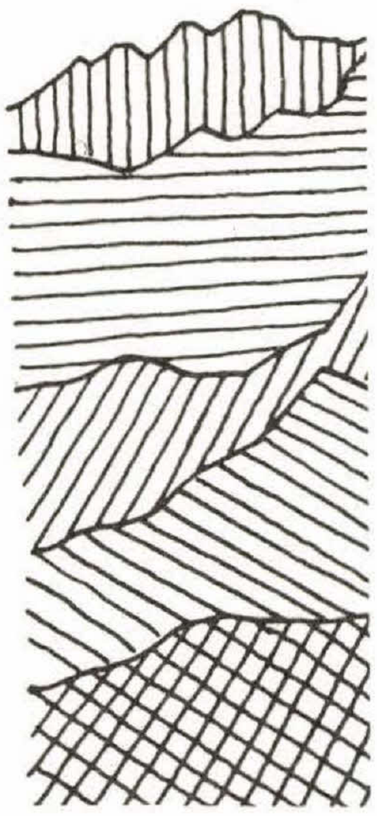
去る十二月十八日、如水会館、武蔵野の間にて昭和六十一年忘年会を盛大に開催した。出欠通知を提出せず不法に参加する会員が十名に及び、いささか幹事をあわてさせたが、不都合もなく無事閉会。学生一名

を除く参加者三十六名に対し、会費は四千円多い二十二万円が徴収され、一方支出二十一万八千二百円であった。都合千八百円の黒字会計となり幹事もほっとした次第。余りは、二次会の一部に充当させて頂きました。

席上、Y・中村氏逝去の報告に、一同故人の有りし日を惜むこと切であったが、引地君のスライドによる海外登山報告、紅一点女子学生の大野君による学生部活動報告等、出席者を大いに楽しませ、最後は山讃賦にて、幕を閉じた。

今回若手出席者が少なく方々よりの要望も有り、日を改めて若手による懇親会を開催することといたします。追而通知致しますので、振って御参加下さい。

（岡部　記）



二、会員異動

藤本　敏行（昭51卒）
現住所　FLAT3,1,RIVERDALE ROAD,
EAST TWICKENHAM,
MIDDLESEX, TW1 2BT,U.K.
Tel　01－891　－4833

岡部　寛史（昭55卒）
現住所　〒二三二　横浜市南区大岡
一―三二―一四―二〇三
Tel　〇四五（七一五）五三四三

中村　雅明（昭43卒）
勤務先　〒一七五　板橋区成増
一―二―一〇
㈱三菱油化メディカル・サイエンス
システム部
Tel　〇三（九七七）〇〇八五

三、会員逝去

中村幸正（昭33卒）
昭和六十一年十一月三十日肝臓癌により逝去

編集後記

◇昨年末のY中さんの訃報は突然で驚かされました。あのすばらしい人柄が今さらながら偲ばれます。心から御冥福をお祈り申し上げます。

◇昨夏の海外駐在組の山行報告が二編届きました。山そのものの違いはもとより、登り方、山に対する考え方の違いにも興味を覚えます。

◇私の今年の正月山行は、ラッセルと厳しいヤブコギのため退散という散々な結果でしたが、皆様は如何だったでしょうか。投稿をお待ちしています。

（引地）

表紙写真説明

マッターホルン
一九八六年七月二四日
リッフェルゼーにて

（撮影・前神　直樹氏）